書　評

上杉和央・加藤政洋　編著
『地図で楽しむ京都の近代』
風媒社　2019年2月　152頁　1,600円＋税

ブラタモリの好影響もあってか，ここ数年地理的関心に基づいた街歩きが活発化しているのはたいへん喜ばしい。そうした街歩きの伴侶として，全国各地で観光ガイドブックの域を脱した書物が数多く出版されている。

本書をそうした書物の中の１冊ととらえることもできるが，これまでの類書がいずれも前近代―京都が都（みやこ）であった時代―に重点を置いていたのに対して，本書はタイトルからも知られるように近代の京都に焦点を絞っている。この点は類書にないユニークさを主張できるものと言えそうである。

なお版元の風媒社は名古屋の出版社で，もともと教育関係や福祉関係の出版を数多く手がけていたが，ここ数年，街歩き，歴史歩き関係の書物を相当数刊行している。とくに『古地図で楽しむ○○』や『○○地図さんぽ』と題する書物は，本書を含めるとすでに10冊以上を数えるに至っている。

目次は以下のとおりである。ただし章に相当する箇所の通し番号は，書評時の指示の必要上評者が付けたもので，書物中に記されているわけではない。こうした事情から，該当箇所を指示する必要がある場合には，たとえば「６章」のように番号とかぎカッコをともに用いることにする。

はじめに（上杉和央，２頁）
最新京都市案内図（戦前）
Part 1　京都近代地図さんぽ
　1．京都と近代地図（上杉，８頁）
　2．「京都」なる領域を描く（島本多敬，４頁）
　3．長谷川家住宅所蔵「京都市明細図」を読む（河角直美，８頁）
　4．京都府立京都学・歴彩館所蔵「京都市明細図」を読む（河角，６頁）
　5．「京都市明細図」と占領期の京都（河角，10頁）
　6．吉田初三郎の描いた昭和初期の京都（上杉，8頁）
　Column① 最新京都市電案内図（上杉，1頁）
Part 2　地図に秘められた京都
　7．西之京の前近代をさぐる（三枝暁子，６頁）
　8．鴨川の橋をめぐって（中川　理，６頁）
　9．吉田神社と共存する京都大学（山村亜希，８頁）
　10．千本三条・二条城界隈（森田耕平，４頁）
　11．占領期京都に存在した引込線（森田，８頁）
　12．京都駅界隈の成り立ち（中川祐希，４頁）
　13．外郭道路（北大路・西大路など）と区画整理（中川　理，８頁）
　14．「京都市明細図」と洪水の歴史（河角，６頁）
　Column② 四条烏丸の交差点（上杉，１頁）
Part 3　地図が語る，地図と語る
　15．お俊伝兵衛と近代京都（竹内祥一朗，４頁）
　16．水上勉の≪五番町≫（加藤政洋，６頁）
　17．博覧会の風景（上杉，４頁）
　18．双六で名所めぐり（上杉，４頁）
　19．名所いまむかし（上杉，８頁）
　20．祝祭空間を演出する舞台 洛東の遊楽地（加藤，６頁）
　21．昭和の盛り場≪新京極≫漫遊（加藤，８頁）
参考文献（２頁）
おわりに（加藤，２頁）

以上から明らかなように，全体はPart 1からPart 3まで３つの部分に分けられ，各partは６～８の章から構成されている。Part 1の前には編著者の１人である上杉（京都府立大学准教授）による「はじめに」が，巻末には同じく編著者の加藤（立命館大学教授）による「おわりに」がある。本論的な部分は，編著者２人を含む10人の執筆者によってそれぞれ単独で執筆されているが，頁数の配分は４～10頁とかなり幅がある。先にふれた，章に相当する箇所に番号が付いていないこととも併せ考えると，どこから読み始めても構わないという編集上の意図が感じ取れる。つまり，各章の独立性の強さということである。

そうは言いつつも，3つのpartについては，やはりそれぞれの特性を読み取ることが可能であろう。編著者の意図とは多少離れることになるのを承知の上で評者なりに総括すると，Part 1については，序論あるいは総論的内容をもつ章から構成されており，Part 2は地域あるいはテーマのどちらか一方を絞った内容が盛り込まれ，Part 3は地域，テーマともに絞った内容，とりわけ「地図で楽しむ」との趣旨に忠実な内容ということになろうか。

本書で用いられている地図のほとんどは，近代古地図という表現が適切と考えられるジャンルに含まれる。また，その大半が民間図であるということも，本書の特色として指摘できるであろう。2万分1，2万5千分1，あるいは5万分1といった地形図を使って近代の京都の地域像を明らかにしようとする試みはこれまでにもいくつかあり，評者もその一翼を担ったことがある[1]が，官製地形図を用いるととかく四角四面な読図に終始しがちであり，「地図で楽しむ」ことを謳う本書ではそういったアプローチをあえて避けたのではないかと思われる。

本書で取り上げられている各種の地図の中で評者が最も強い興味を抱いたのは『京都市明細図』である。「3章」と「4章」で概要の紹介が行われているのに加えて，「5章」・「14章」などでも，それを利用した考察が行われている。本資料は縮尺1,200分1のA2判の図300面近くからなる図集で，火災保険業界の需要に応じて作成されたものと考えられている。作成に当たっては地籍図が利用されたようである。「3章」で扱われる長谷川家住宅所蔵図が『京都市明細図』の初版かそれに近い版（1927年ごろ）であるのに対して，「4章」で紹介される府立京都学・歴彩館所蔵図は1940年代の版の図の上に，戦後の1950年ごろになって建物用途別利用の情報を手書きで記入したものである。この資料はどちらも現物の所蔵自体はごく限られたものではあるが，すでに，これらの章の執筆者である河角（立命館大学准教授）らによって内容のデジタル化が行われ，立命館大学アート・リサーチセンターからインターネット公開も行われている[2]。そのため，本書に図が掲載されている以外の地域についても，現地でタブレット端末やスマートフォンの画面にその地区の図の内容を表示することが可能である。古地図を携えての街歩きのあり方に新たな地平を開いたものと言えよう。

もう1種類，評者が注目した図は，最後の「21章」で用いられる『昭和九年六月 京極と其の附近案内』である。三条から四条までの新京極と寺町通り（周辺路地を含む）一帯の事業所を，業種だけでなく店名を含めて表示した商工案内図である。この図を見ながら現地を歩いたなら，図中に約10館見える映画館・劇場と思われる施設のほとんどが，今日では姿を消していることに気づくであろう。その一方で，図上に記される事業所やその他の施設（たとえば公衆トイレ）の中には現存するものも散見されるなど，興味は尽きない。なお，商工案内図の中には事業所の掲載率があまり高くないものも存在しているが，本図での掲載率はかなり高そうだとの印象をもった。ただ，図そのものに関する説明が「京都府立京都学・歴彩館 京の記憶アーカイブから」との出典表示のみに限られているのは，やや物足りなさを感じる。原図の書誌事項に関する情報を多少なりとも補っていただきたかった。

用いられた地図でとくに評者の興味を引いたものは以上であるが，次に，内容で興味深いと思えた章をいくつか選んで紹介・コメントしたい。

まず「5章」。『京都市明細図』を用いて占領下の京都の諸相を描いた章（執筆：河角）である。既述のように京都学・歴彩館所蔵の『京都市明細図』は，もともと建築行政あるいは都市計画行政の基礎資料として作られた建物用途現況図と考えられるが，そこには，進駐軍の利用のために接収された建造物もその旨記され，それぞれに，用途などに関するかなり具体的な文字情報が添えられている。本章中で具体的に図を示して紹介されているのは，三条，四条などの都心部，南禅寺・岡崎地区，市街地西部などの諸地域に及び，用途も占領行政，住宅などの他，図書館，物干場など多様なものが含まれている。これまであまり広くは知られていなかった事実を，資料に基づいて解明した点，高く評価したい。ただ，占領終了後も数年間にわたって接収され続けた府立植物園については，この地図には接収の事実が記されておらず，そうした事情も踏まえてか，執筆者の河角は「…地図だけで占領の全容を知ることは難しいだ

ろう」と記している（44頁）。確かにそのとおりには違いないが，評者としては，むしろ「地図の効用」ともいうべき側面を強調していただきたかったとの思いを抱く。本章の最後まで読めば，河角が，現代人の記憶から薄れつつある占領という歴史的事実を思い出させる資料として，この図を高く評価していることは理解できるのだが，そこに至るまでの数行の文章の意味がやや捉えにくいこともあって，上記のような思いを抱いた次第である。

「9章」は，京都大学のメインキャンパスである吉田地区を取り上げ，明治中期にそこに立地した第三高等中学校（まもなく第三高等学校；戦後は京大教養部），そして京都帝国大学（現在の京都大学）を中心に据えながらも，そこの前近代の歴史地理にも目を配った叙述がなされている。執筆者の山村（京都大学教授）の京都大学での共通教育科目の講義内容の一部かとも想像されるが，本章には折田先生像をめぐる話題などもあり，このような講義は京大の学生に強いインパクトを与えそうである。当初評者は，講義としてはともかく，より広い読者層を前提とする書物の内容としてはややローカル過ぎるテーマかとも感じたが，よくよく考えてみると，今日のインターネット環境ならば，「折田先生像」はグーグルなどの検索ですぐに概要がつかめるのであり，上記の懸念は杞憂と考え直した。

「11章」が対象とする時期は「5章」と重なるが，ここでは占領それ自体というよりは，占領との関係で建設・利用された2本の鉄道線に焦点が当てられている。鉄道とはいっても旅客輸送を目的とするものではなく，進駐軍の物資輸送のための貨物専用線である。一方は，山陰本線の花園駅を起点とし，接収されて米軍倉庫となった島津製作所三条工場を終点とするもの（二条軍用側線）で，1947年に新設された。またもう一つは，山陰本線の二条駅と，やはり接収された日本写真印刷（現NISSHA）工場（ただし接収されたのは工場の一部）を結ぶもの（四条軍用側線）で，こちらは既存の貨物専用線を1947年に延長したものである。執筆者の森田（立命館大学大学院博士課程）は，1950年代の1万分1地形図にこれら2本の鉄道線路が表示されていることから論を始め，1940年代後半の複数の空中写真も用いてこれら2本の路線の建設事情を解明するとともに，占領終了後廃止されるプロセスと現状などについても各種の資料を併用しながら解説している。民間刊行の図を多用する本書の中にあって本章はやや例外的で，地形図，旧公図（地籍図），基盤地図情報など官製図が多く用いられている。空中写真もおそらく同様であろう。森田は，地理学研究者の中に数多いとされる鉄道ファンの一人かと推測されるが，本章の内容は読図好きの地理ファンと鉄道ファンの両方を満足させるものと言えそうである。唯一惜しまれるのは，所定の頁数に収めるのが大変だったのか体言止めの文章が頻出することで，そのため読みやすさが多少損なわれているように思われた。

本書の執筆者の多くは地理学を専攻する研究者である。しかし一部の「章」は他分野の研究者に執筆を依頼している。「13章」はその一つで，建築史・都市史専攻の中川　理（京都工芸繊維大学教授）によって書かれている。中川は，これまでにも近代の京都について多くの著作をあらわしており，本章は1920～30年代の京都の都市計画史に関する，当該分野の第一人者による的確な素描と言える。とりわけ，当時の土地区画整理事業実施地区の全体像を示す地図（『京都土地区画整理事業概要』の表紙）に加えて，千本北大路～金閣寺付近の区画整理事業以前の土地区画と事業完了後のそれを示す2枚の大縮尺図が用いられているのが，読者の理解を大いに助けている。あえて評者の希望を記すならば，地形図あるいは都市計画基本図など，市街化の進展の実態を知ることのできる地図資料を併せて提示していただければ，より深い理解に到達できたのではないかとの感想を抱いた。

「16章」は，水上勉の自伝的小説ともいうべき作品である『五番町夕霧楼』を題材として，その舞台となった五番町遊廓の現実と文学作品としてのフィクションを識別する作業も行いながら論じている。執筆者の加藤は，遊廓を正面から取り上げた著書，論文をこれまでから公刊しており，手慣れたテーマであることが読みとれる。この章に掲載されている地図は1枚で，「五番町位置図」と題されている。加藤自身の作成した図と思われるが，この図の内容は単に位置を示すにとどまらず，ある時期の五番町遊廓一帯の状況を示した歴

史地図というべきものである。ただ，この図で気になるのは，図作成に当たって用いられた資料に関する説明が，図のキャプションとしても，あるいは本文中にも見られないことである。京都学・歴彩館所蔵の『京都市明細図』の可能性が高いように評者には思われるが，あるいは列挙するのが煩雑になりすぎるほど多数の資料を総合されたものであろうか。

個別の章についての紹介・論評は以上で打ち切るが，編著者の１人である上杉の担当した部分，とりわけPart 3に含まれる３つの章については，ここで一括して取り上げたい。上杉はPart 1でも２つの章（とcolumn）を執筆しているが，それらの２つの章は大変オーソドックスな記述で，コメントすべき点はあまりない（強いて言えば，吉田初三郎の鳥瞰図について扱った「６章」では，吉田が京都の出身であったことにふれてほしかった）。一方のPart 3中の３つの章は，かなりユニークな特色を共通して有しているように思われる。その特色とは，本書の書名にある「地図で楽しむ」を強く意識したテーマ，文章になっていることである。もちろん，地図からの読み取りにより新たな知見を得られる内容もあり，評者にとってはとくに，1928年の昭和御大典を期して行われた博覧会について紹介した「17章」に教えられる点が多かった。一方で，たとえば「18章」などの文体は，若干軽すぎるように思われる。

以上，すべての章について紹介・論評することはできなかったが，これは主として評者の関心領域の狭さに起因するものであり，省いた章については，適切なコメントを行う能力が評者に欠けているとご理解いただきたい。

そのことをお断りしたうえで，本書を通読しての総括的な感想について記したい。

その最大のものは，本書の内容，より具体的には扱うテーマの中には，本書の書名に含まれている「地図で楽しむ」ということにややそぐわないものが含まれているのではないかという点である。「楽しむ」という言葉を「知的好奇心を満たす」という意味合いを含むものと考えることは十分可能であり，その意味では，本書の内容の中に楽しめないものはないのかもしれない。しかし，評者の日本語感覚からすれば，例えば戦記文学などを「楽しむ」対象と表現することには違和感を禁じ得ない。本書に戦争そのものが取り上げられているわけではないが，戦争の結果であり，かつ日本人資産の接収（無償ではなかったのかもしれないが）を伴った占領という出来事は，やはり楽しむべき対象ではないように評者には思われる。占領以外にも，本書には「楽しむ」というには重いテーマがいくつか取り上げられている。もし本書のタイトルが『地図で読み解く京都の近代』とか『近代京都地図さんぽ』というものであれば，評者のこのような違和感は生じなかったであろう。このあたりのことは，編著者と出版社の担当編集者との間で話題には上らなかったのであろうか。

誤記・誤植はそれほど目立つわけではないが，皆無とは言えない。気づいた点を頁の順に記す。カッコ内が正しいと思われる字句である。重版の折に訂正されることを望みたい。

・23頁：都市製図社（都市整図社）
・77頁：折田彦一（折田彦市）
・88頁：武田吾一（武田五一）
・112頁：千本中立売の南東（……南西）
・122頁：泉桶寺（泉涌寺）
・149頁：横山貞雄（横山卓雄）

また20頁にある「1876年８月には，丹後国５郡および丹波国天田郡からなる豊岡県が併合され」という文章は，豊岡県全域が併合されたかのように誤解される恐れがある。「豊岡県の内，丹後国５郡および丹波国天田郡が併合され」，あるいは「豊岡県の解体により，丹後国…」とする方がよかったのではないか。

以上，やや大きな疑問点や細かい要修正点を指摘したが，オールカラーで多くの地図を提示し，しかも手ごろな価格の本書が広い読者層に受け入れられるであろうことは間違いなさそうである。有名社寺とネット情報上位の飲食店めぐりに終始する内外観光客とは一味違う京都の街歩きの伴侶として，格好の書物が刊行されたことを，一読者の立場で喜びたい。

（山田　誠）

〔注〕

1）山田　誠「古都の近代化―京都市―」（平岡昭利・野間晴雄編『近畿Ⅰ　地図で読む百年―京都・滋賀・奈良・三重―』古今書院，

2006)，1-10頁；山田　誠「京都」（平岡昭利編『地図で読み解く日本の地域変貌』海青社，2008)，220-225頁（一部修正のうえ，平岡昭利編『読みたくなる「地図」西日本編―日本の都市はどう変わったか―』，海青社，2017，36-41頁に再録）

2）https://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/ModernKyoto/　2019年7月15日最終閲覧。